

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【授業担当者】

所属/職名: 理工学研究科グローバル人材育成支援室/室長

氏 名: 古澤 仁

授業科目名	STEMのための国際コミュニケーション海外研修(GOES)
研修先 (大学・国・都市名)	西オーストラリア大学附属語学学校(CELT)(オーストラリア連邦西オーストラリア州パース)
研修期間	令和 5年 7月15日 ~ 令和 5年 9月24日
<p>【研修の目的・概要】</p> <p>本プログラムは、グローバルに考え地域に貢献すること(Glocalization)によって世界に貢献する「グローバル人材」の養成を目標とする。この人材養成のためには英語力とコミュニケーション力に加えて、グローバルな視点と自身の専門知識に立脚した課題発見能力と問題解決能力を持たせることが必要である。</p> <p>目標達成のため次のことをプログラムの目的とする。質の高い語学学校において、国籍や文化を異にする多様な学生と直接英語で議論すること。その過程で異文化理解を深めること。STEM人材育成のために企画されたプログラムにより、専門知識の習得に加えて実践的なコミュニケーションを行うこと。グローバルに議論されるべき社会的な重要課題を発見する能力やその解決策を探る能力を研鑽すること。</p> <p>10週間、豪州パースへ派遣する。期間中は語学学校での英語研修に加えて、理工系プログラムや日本研究を専攻する学生との言語的・文化的交流活動へ参加する。さらにホームステイを通じて語学力の向上および異文化への理解を深める。</p>	
<p>【研修の成果】 * 事前・事後学習も含む。研修の目的や学習成果の達成状況について、また地域のグローバル化や活性化に資する人材育成の観点からの成果についても記載して下さい。</p> <p>研究科Q2期と夏季休暇の期間を利用して、豪州パースへ理工学研究科博士前期課程の学生7名を派遣した。</p> <p>事前研修は8週間にかけて毎週行い、その他個別相談にも応じた。海外研修のための語学的準備を整えると同時に、学生に危機管理意識と目的意識を持たせた。</p> <p>派遣先における英語研修は、学生のレベル別にクラス分けがなされ、コミュニケーション能力発達のために用意された優れたカリキュラムによって、学生は数多くの訓練を受け、コミュニケーション能力と国際的視野を身に着けることができた。また、学生は全員期間内にクラスの修了条件を満たし、修了証を受け取った。</p> <p>語学研修のほか複数のプログラムを実施したが、特に西オーストラリア大学が企画した理工系ワークショップ(全4回)では、調査研究や対話を行った。この研修を通じて自らが培ってきた能力がどの程度通用するのか、また自らに足りない資質は何かを体験的に学んだ。国際電波天文学研究センター(ICRAR)では、研究活動報告会に参加して学際研究の現場を体感し、現場の研究者との意見交換を通じて、自らの専門家としての意識を見つめ直す機会を得た。日本研究を専攻する学生との言語的・文化的交流活動では、外からみた日本人や日本文化、日本社会とは何か考えさせられる機会を得た。ホームステイ先での日常的な会話は、学生にとって自身の英語力の伸びを実感できる場であり、自信を持つきっかけになったようだ。いずれも学生達にとって有意義な学びとなった。</p> <p>これらの経験から、今後どのような視点に立って、日本社会や地域社会をより良くしたいという各々考えが生まれたことも嬉しく思っている。</p>	
<p>【今後の課題】</p> <p>コロナ禍の2020年~2022年は、海外での研修を断念したため、例年行っていた先輩から後輩への経験の学生間の継承が一旦途絶えてしまった。この点においては、来年度以降は解消され、受講者が増加するものと期待している。</p> <p>大学院全学横断的教育プログラム科目はなくなったが、他研究科の大学院生も、自由科目として履修し、条件を満たすことによって単位取得が可能である。つまり、依然として、全研究科からの派遣参加が可能である。次年度以降は他研究科からの参加が再び現れるように働きかけたい。</p> <p>西オーストラリア大学とのプログラム企画については、来年度の開催に向け、またプログラムの継続と発展を見据え、更なる内容の充実を鹿児島大学と先方大学間で検討する。姉妹都市であるパース市との関わりも増やしていきたい。</p>	